

中国は「閉じた」国家なのか

福嶋亮太
Shohei Fukushima

『wasubun U30』に寄稿した論考では、現在の中国文化が情報化やグローバル化の流れにいかに応答しているかということテーマに、いくつかの事例（陸川の映画、余華の小説、郭敬明の出版上の試みなど）を紹介した。とはいえ、そこで議論はもっぱら、ここ数年のあいだに出てきた映画・小説における固有名の扱いの問題に限定されており、いささか歴史的な視点が欠けているくらいがあった。そこで、この評論ではその欠を補う意味で、別の角度から論点を補足しておきたい。それは、中国のグローバル化そのものは決して昨日今日の出来事というわけではないということである。

ひとびとはともすれば、中国というと暗黒の専制国家であり、きわめて排外的な社会が持続してきたかのように感じてしまう。しかし、それはむしろ錯覚にすぎない。たとえば、中国近代経済史の

研究者である城山智子が述べているように、中国の対外関係の性質は、二〇世紀の前半と後半とで比較的是つきり区別することができるといえる。私たちがよく知るように、確かに二〇世紀半ばの中華人民共和国の成立以降は、徐々に経済のコントロールが強められ、統制が厳しくなっていく。しかし、二〇世紀前半においては、中国と世界のあいだにはむしろ非常に活発なヒト・モノ・カネの動きがあった。

特に、戦前の上海が世界有数の国際都市であったことは有名だが、それ以外にも、即物的な「カネ」の流入がマイクロなレベルで発生している。たとえば、海外に出稼ぎに出ていた華僑らの小口送金を支えるメカニズムが一九世紀後半以降整えられ、輸入超過を続けていた中国経済を支えた。また、二〇世紀前半の中国人は、貨幣についても中央銀行の発行に一元化するのではなく、しばしば海外で発

行されたものを平然と使用していた。有名なのは、スペイン・ドルやメキシコ・ドルで、それらほときに国内鑄造の貨幣よりも信頼され、社会的に広く流通していたのである。当時の中国社会は、それら複数の貨幣を「銀」に紐づけすることによって、貨幣発行の乱発を防ぎ、とりあえずの信用構造を維持していた（城山「中国と世界経済」飯島涉他編『シリーズ20世紀中国史 近代性の構造』所収。ともあれ、対外的な交流が活発化するなか、良くも悪くもかなりゆるい通貨制度が生成していたというのが、二〇世紀前半の状況だったのだ。

こうした海外とのネットワークの発達は、必ずしも経済領域だけには限られない。思想や文化についても、海外との密な交流を抜きに考えることはできない。たとえば、一九二〇年代の中国のマルクス主義者は、アメリカで発行された社会主義雑誌から多くの情報を得ていたことが知られている。特に、当時はロシアの政情不安もあって、ポリシェヴィズム理解に必要なロシア語原典はなかなか手に入らなかった。そこで情報の窓口となったシカゴの出版社を通じて、中国のマル

クス主義者は欧米の英語文献を入手し、ポリシェヴィズムの言論の撰取に励んでいた。その痕跡は、たとえば中国の社会主義雑誌の体裁が、しばしばアメリカの雑誌のそれを完全にコピーしていたことに如実に残されている（石川禎浩『中国共産党成立史』参照）。

さらに、文学については「アメリカの影」がもつと歴然としている。中国文学の近代化を主導した胡適（フー・シー、一八九一〜一九六二年）は、コロンビア大学のジョン・デューイの下で学んだプラグマティストであり、彼の文学改革のアイディアも、他のアメリカ留学生たちとのサロンの討論のなかから半ば偶然に立ち上がったものである。具体的に言えば、胡適は、『水滸伝』や『紅樓夢』をはじめ多くの小説を生み出した世俗的な出版語（いわゆる「白話」）を、教育や出版において使われる正統的な「国語」として再登録することによって、文化の価値を全面的に書き換えることを企てた。その試みは帰国後の胡適らの活動もあって成功を収め、国語についても、また文学についても、より広域にわたるコミュニケーションを可能にするべく世俗化が

進んでいった。そのプランが構想されたのが、他ならぬアメリカだったのである。日本の近代文学が「翻訳」のなかで形成されたということはよく言われるが、中国については、ある意味ではもつと即物的に、「ヒト」がアメリカに集められるなかで、来るべき近代文学の姿が検討され、輪郭づけられることになったわけだ。

付け加えれば、胡適がアメリカに滞在していた一九二〇年代には、ある歴史家が「アメリカン・イノセンス」と評したように、ある種無邪気なまでの進歩思想を許容するような雰囲気漂っていたことが知られている。そうした政治的自由を背景とした大学生活のなかで、胡適をはじめとする中国人留学生たちはいわばハーバード的な討議空間を実現させ、そこで将来の文学の青写真を自由に思い描いていたのである。いずれにせよ、もし「アメリカ」という土地がなければ、近代中国の思想や文学は、おそらくまったく違った進化を遂げたことだろう。

こうして見ていくと、中国が「閉じた」国家だという事態そのものが、歴史的にはかなりイレギュラーなものだということとを窺い知ることができる。経済の面で

も、思想・文化の面でも、もとはあちらこちらに穴が開いていた国家がたまたま二〇世紀後半の二、三〇年ほど固く門戸を閉ざしていた、それが二世紀の手前において世界との交流を再開し、急速なグローバル化の波を受けて今に到る——というのが、広い視野から眺めた中国の近現代史というものなのだ。

むろん、私は別に、現在の中国の負の側面を否定しているわけではない。ただ、ここで改めて確認しておくべきなのは、現状の政治的制度（一党独裁）は決して中国の本質を熟慮した上で作り出されたものではなく、むしろ歴史的偶然の重なり合いのなかで支配権を握ったものにならざるを得ないということである。そもそも、かの毛沢東からして、元来は湖南省を拠点とする辣腕の書店経営者であり、ビジネスマン・実業家としてその才覚を發揮したような人物であったことを考え合わせても（ジョン・ササン・スペンス『毛沢東』参照）、二〇世紀中国の諸々の政治革命というものが、ルソーやロックらの理論を背景とする西洋の政治革命とまったく異質の文脈で織り上げられたことは明らかであろう。であれば、権威的な政治体制の傍

らで、今、資本主義化とネットワーク化が急速に、またなし崩し的に進んでいることも、さほど奇異とするには足りない。

さらにここで、資本主義化とネットワーク化の背景というところで、もう一つ歴史的な視点を付け加えておこう。『wasedun U30』の論考の最後で触れたことも重なるが、中国の文化と資本の関わりについて考える際には、一六世紀の明末時期というのが一つの大きな転換点として重要である。この時期には、出版の拡大によって中国の文化が大衆化するとともに、それまでの思想的・歴史的な「正典」についての歴代の注釈を可視化するような大部の書籍が刊行された。つまり「書くこと」あるいは「読むこと」にまつわる神秘性が良かれ悪しかれ剥ぎ取られ、知識の整理が企てられるとともに、ひとびとのある種生々しい欲望——むろん性的なものを含む——が徐々に肯定されていった時代なのである。そこからは、今日にも続く文化が多数発芽した。先ほど述べた「白話」——今日の中国語の文章の基礎となった書き言葉——にしても、およそ、一六世紀以降の小説の広

がりのなかで定着していった文体なのだ。

この時期の重要性については、歴史的にも、最近さまざま角度からの検証が進んでいる。特に北米の学者は、一四世紀の明の成立以降をLate Imperial China（後期中国帝国）と名指し、それ以前の中国との切斷を強調している。そのなかでも、やはり一六世紀半ばから一七〇〇世紀にかけてが一つの大きな時代的まとまりとして捉えられるだろう。たとえば、二〇〇五年に刊行されたある論文集の序文では、こう宣言されている。「この書物では、明と清（特に一六世紀半ばから一七〇〇世紀初めの数十年の時期）を一つの歴史的なユニットとして検証する術を探求することによって、一七〇〇世紀および現代中国における近代的（さらにはポストモダンの）な想像力と経験に、いかにその影響が残存しているかを理解しようと努めている」（David Der-wei Wang and Shang Wei ed., *Dynastic Crisis and Cultural Innovation: From the Late Ming to the Late Qing and Beyond*, p.3.）。つまり、文化史の研究者にとっては、いわゆる近代的あるいはポストモダンの変動の底流に、何か長期にわたる歴史が横たわっているかのよ

うに感知されている。それくらいに、明代の「切断」の影響力は大きかったのだと言えるだろう。

そして、一六世紀半ばにおけるこの切断の余波は、中国の外にも広がっていく。特に日本の江戸文化は、知識人たちによる注釈学にせよ、大衆的な文芸にせよ、この明末の出版文化から多大な恩恵を受けた。このことは、日本人が伝統と接するやり方をも大きく変えてしまう。田中優子の『江戸の想像力』（ちくま学芸文庫）の記述を借りれば、「漢籍が平安朝の国風文化を生み出したように、中国俗文学は、鎖国時代の国学の文化を生み出した。〔中略〕読本というジャンルがいかに国学と関わり深いかは、上田秋成に典型的に見られる。ここでは、漢籍の脈絡や仏教の脈絡が中国俗文学によって破壊されるといふ、白話小説の、実にふさわしい使いかたがなされている。』（二五九―二六〇頁）

要するに、出版の発展に伴って生育した中国俗文学（白話小説）は、日本に流入するなかでまず読者層を大きく広げ、それを通じて旧来の知の再配置を促したのである。この見方によれば、江戸文化はたんに鎖国の産物というばか

りではなく、東アジア規模の社会的転換の「後」に位置するものだと考えねばならないだろう。江戸時代がすでに「記号の帝国」（バルト）であり、爛熟した消費社会であったことはよく指摘される。だが、江戸の消費文化には、あくまで明代中国（＝後期中国帝国の成立）という「前史」があった。この連続性は軽視されるべきではない。

いづれにせよ、仮に東アジアの大衆文化史が描かれるとしたら、その一つの「起源」はやはり一六世紀頃ということになるだろうし、実際、論考で触れた「八〇後世代」に代表される中国の若手作家にさえ、一六世紀以降育まれた大衆的な文学の特徴がしばしば露出している。私はいづれ——いつのことになるかはわからないが——、二〇世紀以来のグローバル化・情報化によって規定される短期的な歴史と、一六世紀以来脈々と続く長期的な歴史との交点に、今日の（日本を含めた）東アジア文化を置き直すような仕事をしてみたいと思っている。そのような重層的な文化史によって、東アジアの自己理解や自己認識はより深まっていくだろう。